

作文方程式

【上級編】

論説文 WHY 文用 テンプレートの使い方

論説文 WHY 文用テンプレート【上級編】の使い方をご説明します。

1. 方程式文の作成

1-1 下準備

まずは方程式文を作成しましょう。

方程式文というのは

「A は B である」

「なぜなら C だから」

「ということは D だよね」

という三行からなるシンプルな文章であることはすでに（論説文用テンプレートの使い方説明書の中で）説明いたしました。

しかし、WHY 文の場合、以下のように方程式文が若干変わります。

「A の理由は B である」

「その根拠は C だから」

「ということは D だよね」

通常の方方程式文をそのまま当てはめると B と C が同じものになるからです。求められている答えが理由そのものになってしまうからです。

以下、この WHY 文用変形方程式にもとづくテンプレートの使い方をご説明します。

1-2 問いの入力

はじめに問いを入力します。

第一ステップ 問いと答えを明確にして方程式文を作成します

▼作文方程式

1行目	A:明らかにしたい問いはなんですか？ 問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ？	は
	B:それに対する答え（理由）は？ 答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから	である
2行目	C:もっと詳しく言うと？（なぜそういえるの？） 理由を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である	だからだ
3行目	D:まとめると？ まとめとして書きたいこと（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう	だよな

← 問いを入力します

一般的な論説文用テンプレートの使い方でも説明したように、ここにはあなたが問題にしたい問いが入ります。ただし、ここではその問いが「WHY（なぜ）」で始まる場合を扱っています。

なので、ここでは「なぜ～なのか？」もしくは「～の理由は何か？」という形式で問いを入力してください。

例文でいえば

文章が書けないのはなぜ？（「文章が書けない理由は何？」でもかまいません）

になります。

なお問いが複数あって、どれを選んだらよいのか判らない場合、一番重要な問いを入力してください。一番重要な問いというのは、文全体のテーマに関わる大きな問いです。それなしには文章が成り立たないような、全体を貫く柱となる問いです。

どれが大きな問いでどれが小さな問いなのかは、慣れないうちはなかなか判別できないかもしれません。そういう時は、どれでもよいのでまずはとにかく欄を埋めてみてください。それが適切か否かは方程式を埋めていく過程でみえてきます。

プロセスを進めていく過程でどうも適切でないと感じた場合、別の問いを入れて最初からやり直してください。

1-3 答えの入力

次は答えの入力です。

第一ステップ 問いと答えを明確にして方程式文を作成します

▼作文方程式

1 行目

A: 明らかにしたい問いはなんですか？
問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

は

B: それに対する答え（理由）は？
答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから

である

2 行目

C: もっと詳しく言うと？（なぜそういえるの？）
理由を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である

だからだ

3 行目

D: まとめると？
まとめとして書きたいこと（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう

だよな

答えを入力します

ここでは「なぜ？」と問われているのですから、その理由が答えになります。それを入力してください。

ここはそれほど難しくはないはずです。問いが明確になっていれば普通、答えも明確になっているからです。というより答えがわからないテーマについて書くことなどそもそもありえないでしょう。

注意していただきたいのは、ここでいう答え（理由）というのはあなたの意見だということです。

そのため、一般に結論が出ていない問いに対する答えは「理由はわからない」となります。この場合、理由がわからないことを前提に、どうすればよいのか、などと論じることになります。

※正確にいうと、この場合、「どうすればよいのか（HOW）」が文章全体の問いになるはずです。つまり、この「どうすればよいのか（HOW）」が「大きな問い」に相当し、解決策についてのそれ（ここではWHYの問い）は「小さな問い」に相当します。すなわち、その場合、ここで書くのはWHY文ではなく、HOWからはじまる通常の論説文だということになります。

例文では

問いが明確でないから

になります。

1-4 詳細（根拠）を入力する

次は詳細（根拠）です。ここでは前段の答え（理由）をより詳細に説明します（もしくは根拠を示します）。

第一ステップ 問いと答えを明確にして方程式文を作成します

▼作文方程式

1 行目

A: 明らかにしたい問いはなんですか？

問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

は

B: それに対する答え（理由）は？

答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから

である

2 行目

C: もっと詳しく言う？（なぜそういえるの？）

理由を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である

だからだ

3 行目

D: まとめと？

まとめとして書きたいこと（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう

だよな

詳細（根拠）を入力

ここにはなぜその答え（理由）になるのか、「もっと詳しく説明すると？」「どういう根拠でそういえるのか？」という観点からその詳細（根拠）を簡潔に記入します。

例文では

文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である

とやや複雑な、三段論法のような形になっています。

論理が込み入ってくるとなかなかそうもいかないのですが、ここはできるだけ簡潔な表現にしてください。よけいな枝葉はばつさりと切り捨て、論理の骨組みだけを浮かび上がらせるようにしてください。

そうでないと論理の流れが見えにくくなります。論理の流れが見えなくなると、書いているうちに論理がねじれてしまう場合があります。論理がねじれた文章では、いくら巧みな表現を駆使した文章であっても説得力がゼロになってしまいます。

そうならないようこの段階でできるだけ明確な論理を組み立てるようにしてください。

この論理の組み立て方法については3の「論証方法を考える」でもう一度触れます。

なお根拠が複数ある場合、「その根拠は以下の通りだ」で始め、それらを箇条書きで列挙する形でもかまいません。

1-5 まとめを考える

次はまとめを考えます。

ここでは「問い」→「答え」→「論拠（詳細）」というそれまでの流れを受けて、「ということは～」もしくは「だから～」という形でまとめとなる文を入力してください。

第一ステップ 問いと答えを明確にして方程式文を作成します

▼作文方程式

1行目	A:明らかにしたい問いはなんですか？ 問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ？	は
	B:それに対する答え（理由）は？ 答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから	である
2行目	C:もっと詳しく言う？（なぜそういえるの？） 理由を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である	だからだ
3行目	D:まとめと？ まとめとして書きたいこと（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう	だよ

←まとめを入力します

まとめに入る内容としては、一般に「結論の再確認」「課題の明確化」「メリットの提示」「補足」「感想」「行動促進」「願望」などがあります。

例文では

文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう

と課題を明確にするとともに読者の行動を促す内容になっています。

以上で方程式文は完成です。

2. 導入の作成

2-1 導入の必要性和難しさ

次に導入を作成します。

導入なしにいきなり問いから始めてもかまわないのですが、通常、何の話題なのかきちんと示さないと「え、いきなり何の話？」と読者をとまどわせてしまいます。

また読んでもらうには冒頭で読者の注目を集める必要もあります。

そのためたいの文章では、最初に読者の興味を引くような話題を持ってきて、そこから本題である問いへバトンタッチするというのが一般的です。

2-2 導入作成のヒント

しかしこの導入の作成は口でいうほど簡単ではありません。導入から問いへ、違和感なくスムーズに導くにはそれなりのテクニックが必要だからです。

多くの人が書き出しに悩むのはそのせいです。導入をどう書けばよいかわからないから書き出しに悩むのです。

では、どうしたらうまい導入が書けるようになるのでしょうか？

正直なところ、これに関しては私も模索中の段階です。「これで決まり」といえるような決定的な法則は残念ながらまだ掴めておりません。

代わりにここでは、ひとつのヒントを提示してみたいと思います。

ベースになっている考え方は「問いを遡る」ということです。

2-3 主題作成のヒント

さて、その導入ですが、ここでは主題とその補足からなるものとして考えます。

図式で示せば、

導入＝主題＋主題補足

という形です。

第二ステップ 「導入」を作成します

▼ 導入

主題

主題：何について問題視しているのかその主題を簡潔に記入します。例：文章作成能力の重要性が増している

主題補足

主題補足：その主題がどうしたのかを補足します。ここから「問い」が出てくるような流れでまとめます。例：なのに文章が書けないと悩む人が多い

ということで、まず主題を作成します。

ここで使用するのは「第二ステップ 導入を作成します」の「導入づくりのヒント」です。

導入づくりのヒント

導入に何を持ってくればよいかわからなくなった場合、問いからその前提を

「なぜ？」でもって順に遡っていくとふさわしい導入（主題とその補足）が見つけやすくなります

問い

第一ステップの問いを再度記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

▼ why?

発端 1

なぜその問いが出てきたかを遡って考えます 例：文章が書けないと悩む人が多い

まず第一ステップで明らかにした問いを再入力します。

問いは「文章が書けないのはなぜ？」でしたね。それを再入力してください。

次になぜそのような問いを発したのか、その前提は何かと遡って考えます。

導入づくりのヒント

導入に何を持ってくればよいかわからなくなった場合、問いからその前提を

「なぜ？」でもって順に遡っていくとふさわしい導入（主題とその補足）が見つけやすくなります

問い

第一ステップの問いを再度記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

▼ why?

発端 1

なぜその問いが出てきたかを遡って考えます 例：文章が書けないと悩む人が多い



その結果、そこには「文章が書けないと悩む人が多い（→だから文章が書けないのはなぜ、という疑問の声が上がる）」という前提があるのに思い至りました。

さて、ここでその前提を吟味してみましょう。それが主題としてふさわしいか、また書き出しとして使えるかという視点から検討するのです。

これでもよさそうな気もしますが、それでも主題にするにはまだ物足りないし、書き出しにするのも難しいような気がします…。

そこでもう一度その前提は何かと遡ります。

※漠然と考えるのではなく積極的に情報収集をしながら考えてください。

問い

第一ステップの問いを再度記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

▼ why?

発端 1

なぜその問いが出てきたかを遡って考えます 例：文章が書けないと悩む人が多い

▼ why?

発端 2

それはなぜなのか、さらに遡って考えます 例：文章作成能力が重視されるネット時代の要請が背景にある →
例文の場合、これが主題になります



すると、「文章作成能力が重視されるネット時代の要請が背景にある（→だから文章に悩む人が多い）」という前提に思い至りました。

ん？ これならタイムリーな主題だし、書き出しとしても使えるそうです…。

ということで、ここではこれを主題に持ってきました。

このように何度か前提を遡るうちに導入の主題となるものが見えてくるはずです。

それを主題に持ってくるというのがこの方法です。

ただし、この方法にはコツが必要です。

最初のうちは、どれが主題としてふさわしいのか見当がつかないかもしれません。が、まずはあたりをつけて欄を埋めてみてください。

試行錯誤を重ねるうち、どれを主題にもってくればよいのか、そのコツがだんだんわかってくるでしょう。

2-4 主題補足作成のヒント

次に主題補足です。これはそれほど難しくありません。通常、「前提」を逆にたどったものがそのまま主題補足になります。

例文でいえば

「文章作成能力の重要性が増している」という主題に続く、
「なのに文章が書けないと悩む人が多い」が「主題補足1」になります。

導入づくりのヒント

導入に何を持ってくればよいかわからなくなった場合、問いからその前提を
「なぜ？」でもって順に遡っていくとふさわしい導入（主題とその補足）が見つけやすくなります

問い

第一ステップの問いを再度記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

▼ why?

発端 1

なぜその問いが出てきたかを遡って考えます 例：文章が書けないと悩む人が多い

▼ why?

発端 2

それはなぜなのか、さらに遡って考えます 例：文章作成能力が重視されるネット時代の要請が背景にある
例文の場合、これが主題になります

▼ why?

.

.

.

▼ why?

※主題としてふさわしいものが出てくるまでこの作業を繰り返します。
通常ここでの考察を逆転させると「主題→主題補足」の流れが出来上がります。

主題補足

ここで「主題～主題補足～問い」までを順に並べてみてください。そしてそれを最初から読んでみて意味の流れがスムーズかどうかを確認してください。

例文では以下のような流れになります。

主題： 文章作成能力が重視されるネット時代の要請が背景にある

主題補足 1： 文章が書けないと悩む人が多い

問い： 文章が書けないのはなぜ？

どうでしょうか？ それなりに意味が通るのではないのでしょうか？

ということで、ここではこの流れを採用することにします。

なお、意味の流れがスムーズでなかった場合、それは論理に無理がある証拠です。

その場合、もう一度ヒントに戻って同じ手順を繰り返してください。

論理に無理が生じたのは、おそらく遡る方向を間違ったからです。間違った方向に遡ったので間違った主題にたどり着いてしまったのです。

やり直す際は、遡る方向を少しずらしてみてください。

2-5 導入を作成する

以上をもとに実際に導入を作成してみましょう。

先ほどのヒントで探した主題と主題補足を入力してください。

第二步 「導入」を作成します

▼ 導入

主題 主題：何について問題視しているのかその主題を簡潔に記入します。例：文章作成能力の重要性が増している

主題補足 主題補足：その主題がどうしたのかを補足します。ここから「問い」が出てくるような流れでまとめます。例：なのに文章が書けないと悩む人が多い

主題を入力

主題補足を入力

主題補足の欄にはヒントで出てきた主題補足 x を必要な分だけ順に入力してください。ただし全部を入れる必要はおそらくないでしょう。いくつかは省略しても意味が通るはずだからです。

さて、これをもとに書き直したのが

文章作成能力の重要性が増している。なのに文章が書けないと悩む人が多い

という導入文です。

これに続いて

文章が書けないのはなぜ？

という問いが導かれることになります。

いかがでしょうか？ なんとかさまになったのではないのでしょうか？

2-6 導入作成は習うより慣れろで

この導入はなかなか厄介です。慣れないうちは適切な導入文がなかなか出てこないかと思います。

この導入部分についてももっと確実に正解が導き出せる方程式を作りたいのですが、残念ながら現状ではそこまでの法則は発見できていません。

恐縮ですが、ここは習うより慣れろの精神で試行錯誤を繰り返してみてください。何度も繰り返しているうちにだんだんコツがわかってくるはずです。

3. 論証方法を考える

3-1 3つの論証方法

次は論証方法です。

ここは複雑な論理構造をもつ長文を書く際にお使いください。なお第一ステップで入力した「根拠」でほぼ言い尽くされている場合、省略してもかまいません。目安としては1,000文字以内の文章であればたいてい不要です。

ここでは3通りの論証方法を示しました。

第三ステップ 論証方法を考えます

「方程式文の2行目「もっと詳しく言うと？（なぜそういえるの？）」の部分により論理的に説明する際に使用します。

複雑な論理構造を持つ文章以外、ここは省略してもかまいません

目安としてはおよそ1000文字以下の文章では不要です

▼ 単純な理由列举の場合

理由1	例：xだから
理由2	例：yだから
理由3	例：zだから

▼ 演繹法の場合

前提1	(AはCである等) 例：文章の柱は問いである
前提2	(BはAである等) 例：文章には柱が必要である
結論	(BはCである等) 例：したがって文章を書くには問いが必要である

▼ 帰納法の場合

事実1	例：果物であるりんごは植物である
事実2	例：果物であるみかんは植物である
結論	(複数の事実から導かれる共通点) 例：果物はすべて植物である

3-2 根拠の列举

ひとつ目は単純な根拠の列举です。

これは根拠が複数あり、しかもそれらが並列関係にあるケースです。

例文はこれには当てはまらないので「ラーメン例文編」のもので示します。

- 1、「比内地鶏を長時間煮込んで作った濃厚ながらもあっさりしたスープが絶妙。」
- 2、「やみつきになる味。」
- 3、「全国から客がやってくるほどの評判。」

「ラーメン例文編」では、上記3つがそれぞれ独立した根拠という形で並列に挙げられています。

3-3 演繹法

ふたつめは演繹法です

演繹法というのは普遍的な前提をもとに、より個別的な結論を引き出す推論方法です。といっても抽象的すぎてよくわからないかと思いますので、もう少し具体的な例を出してみましょう。

こういうものです。

最初に「果物は植物である」という誰もが認める大前提を提示します。

↓

ついで「リンゴは果物である」という小前提を提示します。

↓

そこから「（だから）リンゴは植物である」という結論を導きます。

これは演繹法の典型とされる三段論法による推論です。

記号で示すと次のようになります。

A=C

B=A

したがって B=C

ちなみにこの演繹法では前提が正しければ導かれる結論も必ず正しいものになります。

なお例文では

文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である

となっています。

ここで

A=柱

B=文章

C=問い

と置くと、

文章の柱は問いである $A=C$

文章には柱が必要である $B=A$

したがって 文章を書くには問いが必要がある $B=C$

となり、いちおう論理に適っていることがお解りいただけるかと思います。

3-4 帰納法

次は帰納法です。

帰納法というのは、演繹法とは逆に個別的な前提をもとに普遍的な結論を引き出す推論方法です。

これも具体的な例で見ましょう。

次のようになります。

果物であるりんごは植物である

果物であるみかんは植物である

果物であるメロンは植物である

↓

したがって果物はすべて植物である

記号で示すと

A1 は X である。

A2 も X である。

したがって A は X である。

という形式になります。

注意しなければならないのは、この帰納法はそこから導かれる結論がおそらく正しいであろうという蓋然性を示すだけで、絶対的に正しいと証明するものではないことです。

そのため厳密な証明が必要とされる場合は演繹法と併用されることが多いようです。

以上が論証の流れです。

ただし論証方法にはこれ以外にもありますし、また実際の文章においてもぴったりあてはまるとはかぎりません。無理やり当てはめようとするとかえって混乱してしまうこともあるでしょう。

なので、ここではあくまで思考を整理するための参考ツール程度にお考えください。

4. アウトラインを作成する

4-1 アウトラインの書き出し

次はいよいよアウトラインの作成です。

といってもこれはそれほど難しいものではありません。基本的には前のステップで入力したものをそのまま、もしくは若干肉付けして再入力するだけだからです。

ただし、ここには若干のコツがあります。それは

- 主語と述語を明確にすること
- 一文一意とすること

です。

またその際、修飾語など枝葉の部分はできるだけ削ぎ落としてください。「A は B である」という形のシンプルな文にするのがポイントです。

こうすることで文の骨格が安定します。骨格が安定すればあとで肉付けする際、枝葉となる語句を付け加えてもねじれないわかりやすい文に仕上げることができます

なお前のステップで入力したものは自動的に反映されません。お手数ですが、コピー＆ペーストなどでご対応いただければと思います。

さて指示通りに入力したら最後に「アウトラインを書き出す」を押してください。

まとめのヒント

まとめに何を持ってくればよいかわからない場合、お使いください。一般に「まとめ」には次のようなものが入ります。

結論の再確認→	結論を繰り返し、強調します 例：したがって喜多方に行った折にはぜひともラーメン馬賊を訪れてみてほしい。
課題の明確化→	課題を明確化し、今後の考察につなげます 例：ただし休日は長い行列なのでできれば平日に訪れた方がよいかもしれない。
メリットの提示→	得られるメリットを示します 例：連日行列ができているが並ぶだけの価値はある！
アクション→	すべきことを訴えます 例：休日は餃子の半額サービスもあるそうだから今日の日曜日にも訪れてみてはどうだろうか。
補足→	書き足りなかった部分を補います 例：ちなみに営業は朝7時から。地元では「朝ラーメン」が当たり前らしい。
感想→	個人的な感想を加えます 例：先日も食べたが相変わらず美味しかった。また絶対食べに行くぞ。
願望→	筆者の願望を示します 例：できれば市内にも支店を出してほしいものだ。

アウトラインを書き出す



そうするとアウトラインが表示されます。

これでいったん作業は完了です。

お疲れ様でした。

4-2 肉付けする

ここであらためてアウトラインを読んでみてください。

いかがでしょうか？

ぶつかりで表現もこなれていないかもしれませんが、いわんとすることの6割～8割は伝わる文章になっているのではないのでしょうか？

あとはそれを10割に近づけるだけです。そのための作業が「肉付け」です。

肉付けというのは、言葉を補ったり、別の言葉に変えたりして表現をブラッシュアップすることです。

どう肉付けするかは自由です。よりわかりやすい表現になるよう各自工夫しながら推敲を重ねてみてください。

なお具体的な肉付け方法についてはここでは触れません。文章の表現力を高めるノウハウ本はすでに数え切れないほど出版されていますし、ネット上にも同様のサイトがたくさんあるからです。

※正直いうと、私は表現力に関してあまり自信がありません。少なくとも皆さんに教えられるほどの表現力は持ち合わせておりません。恐縮ではございますが、表現力を高める方法については出版物やネット上のサイトなどに当たっていただければと思います。なお巻末にオススメの参考書を紹介しましたので、そちらもご参照ください。

代わりに、ここでは肉付けする際のヒントだけ記しておきます。

肉付けの方法には大きく分けて次の二通りがあります。

1、表現を膨らませる

言葉を補い、よりわかりやすい表現に直します。とくに意味が伝わりにくかったり、誤解を招くような部分は言葉を尽くしてきちんと説明します。

ただし文章はシンプルイズベストです。表現を手直した結果、かえって短い文になったとしても簡潔にしてわかりやすいのであれば、それがベストです。無理に膨らませる必要はありません。

2、情報を追加する

文章に肉付けする一番簡単な方法は情報を追加することです。それらを必要に応じて追加してください。ただしいうまでもありませんが、追加する情報は論旨に沿ったものでなくてはなりません。たんに字数を膨らませる目的で無関係な情報を混ぜ込んでしまつては、論旨がわかりにくくなってしまいます。

また論旨に沿った情報であれば、それにふさわしい場所が必ずあるはずです。全体の論旨と前後の流れを確認しながら、ふさわしい箇所に追加してください。逆にふさわしい場所が見つからないのは、それが不要な情報である証拠です。そのような情報を無理に入れ込む必要はありません。